

動詞の否定条件形の構造的両義性

—九州・中四国方言の補助動詞「おく」の非意志的用法から分かること—¹

The Structural Ambiguity of the Negative Conditional Verb Forms in Japanese, Revealed with the Inanimate Use of the Auxiliary Verb *oku* ‘put, keep’ in Kyushu-Chugoku-Shikoku Japanese

山部順治

Junji YAMABE

キーワード: 両義的構文、モダリティ、条件文、否定、望ましき

Keywords: ambiguous construction, modality, conditionals, negation, desirability

1 本稿の概略

「～ないと／なければ／なかったら／ないなら」など、形式的に否定「ない」と条件を表わす形態素を含む動詞形を**否定条件形**と呼ぶことにする。また、これら否定条件形のどれかを含む文を**否定条件文**と呼ぶ。

否定条件文には、「雨が**降らないと／降らなければ**、困る」のように、命題（雨が降る）の事態が話者によって望まれていることを表す用法がある（赤塚 1998, Fujii 2004, 宮部 2014）。本稿は、この例文におけるような否定条件形「～ないと」に対応する九州・中四国方言の「～んと」を主に取り上げ、否定条件形「～んと」などのある種の否定条件形は、命題（雨が降る）の望ましき（雨が降ってほしい）を表すか、または、述語（雨が降る）の否定（降らない）を表すかの間で**両義的**である。いずれも表わせるが、両方を一度に表すことはできない、と論ずる。つまり、否定に望ましきの意味が重ねられるのではなく、否定と望ましきが交替するのである。

本主張は次のような観察に基づく。九州・中四国方言の補助動詞「おく」には、非意志動詞に付加する用法がある。例えば、「ケーキにイチゴが**のっとかんと**さびしい感じにな

¹ 本稿は、第 274 回 筑紫日本語研究会・第 46 回 九州方言研究会（筑紫女学園大学、2019 年 7 月 6 日）で発表した内容をもとにしている。会出席の方々からいただいた知見と励ましにお礼を申し上げたい。また、本稿は、日本学術振興会 科学研究費学術研究助成基金 基盤研究 (C)、課題名：複合述語構文の、話者間・同系言語間・異類型言語間における変異、(研究代表者：山部順治) の成果の一部である。

る」。この用法の「おく」の分布は、望ましさを表す構文環境に限られる(山部 2001, 2002)。一方、「何も」のような否定対極表現は、否定を表わす構文環境においてのみ現れる。これら2表現は、否定条件形「～んと」の節において、相補分布をなす。すなわち、そこでは、これらいずれの表現も出現しうるが、両方の表現が共起することはない。この観察やこれに似た他の観察から、「～んと」節は、否定または望ましさを別々な事例で表しうるが、否定かつ望ましさを同時に重ねて表すことはない、と結論できる。

本稿は、以下で、論点を次のように展開する。第2節と第3節は、本論に主役として登場する諸事象を素描する。補助動詞「おく」の非意志的用法(第2節)、否定条件形「～んと」(第3節)である。第4～7節では、否定条件形「～んと」を含む文について、次の論点に関して事実を観察していく。「何か」「何も」が条件節内に出現するかどうか(第4節)、種々の表現と否定の間の相対的な意味的作用域(第5～7節)。第8節では、第2, 4～7節の論点に関して、「～んと」を他の否定条件形と対比し、また、後件節の事態が望ましい場合と望ましくない場合を対比する。第9節でまとめる。

2 補助動詞「おく」の非意志的用法

本稿をとおして、九州・中四国方言における補助動詞「おく」の非意志的用法(山部 2001)を、文法分析の道具として大いに利用する。この用法は、命題事態の望ましさという意味特徴の目印になってくれる。第2節では、これがどんなものか、紹介する。

補助動詞「おく」は、典型的には、意志的動作について使われる。この用法は、九州・中四国方言に限られず、標準語においても、見られる。以下、例文中では、補助動詞「おく」示すのに、そのカ行音を \square 示す。

- (1) このことをしっかり 覚えと \square う。
試験はちゃんと 準備を しと \square んと いかんよ。

非意志的な事態については、補助動詞「おく」は次のように現れる。

まず、(2)のように、事態を事実として提示するモダリティの文においては、補助動詞「おく」が非意志的動詞に付加することはできない。(2a)は述語(答えが合う)によって描かれる事態の結果状態の成立が、また、(2b)は述語(チャリに空気が入る)によって描かれる事態の結果状態の不成立が、事実として提示されている。本稿の以下であげる例文では、非意志的な事態のうち、アスペクト的には、永続的な状態であって、動作・変化・一時的状態など生起する時間幅に関して限定された事態でないことに留意されたい。(2)のような場

合は、補助動詞「おる」が使われる。補助動詞「おる」を示すのに、ラ行音（あるいはその音声的実現「ー」）をマーカーで示す。

- (2) a. 答えが 合っと { *く / る / ー } かな？
 b. チャリに空気が 入っと { *か / ら } ン。

この様子は、標準語においてと並行的である。ただし、標準語では、「おる」の代わりに「いる」が使われる（例、「答えが合っ { *とく / てる } かな？」）。

一方、(3)のような特定の種類の構文環境においては、補助動詞「おく」が非意志的動詞に付加できる。(3)と(2)とでは、同じ事態が同じアスペクトのもとで（答えが合っている、チャリに空気が入っている）描出されている。すなわち、どちらも非情物の状態である。

- (3) a. 答えが 合っと { け / ?れ } ば 点数はもらえます。
 b. チャリは空気が 入っと { か / ら } ンと 乗り心地がよくない。

九州・中四国方言の例文(3)の状況は、標準語における状況とは、大いに異なる。標準語では、補助動詞「おく」は決して現れず、「いる」のみが現れる（例、「答えが合っ { *とけ / てれ } ば、…」）。

補助動詞「おく」のこの用法を許可する構文環境は、(4)の4種にまとめることができる。これらは、モダリティ的に特徴づけられる。すなわち、事態（(4)での下線部）の望ましさを明示的に意味する構文である。本稿の検討対象である否定条件形(4a)「～んと」もその例である。(4)にあげた構文環境に非意志動詞（空気が入る、答えが合う、晴れる）が置かれた場合には、補助動詞「おく」と「おる」が競合する。そのうちある場合(b)-(e)には、むしろ、「おる」は好まれない。

- (4) 空気が入っ・答えが合っ・晴れ
 ↓ ↓
- a. _____ と { か / ら } ンと （よくない後件事態）。
 b. _____ と { か / ?ら } な （よくない後件事態）。
 c. _____ と { け / ?れ } ば （よい後件事態）。
 d. _____ と { く / *る } べきだ。
 e. _____ と { け / *れ } ! （祈願文）

補助動詞「お\square」をめぐっては、非意志的用法の「お\square」を含め、現在、通時的変化が進行中である。一定範囲にわたる種々の構文文脈において、補助動詞「お\square」は、補助動詞「お\blacksquare」にとって替わりつつある。つまり、「お\square」は、もともと「お\blacksquare」だけが使われた用法領域に進出し、さらにそこから「お\blacksquare」を駆逐しつつある。この変化は種々の構文文脈で生起しているのであるが、それらの構文文脈について2つの軸にわたって多様性が指摘できる。第1に、「お\square」「お\blacksquare」が付く動詞が表わす事態に関して、非意志的用法（例文(3)(4)や次の(5)の[7]）においてだけでなく、意志的用法（例文(5)の[2],[5]のような意志的で一時的な状態）においても、変化が進みつつある。第2に、「お\square」と「お\blacksquare」が埋め込まれる統語上の環境に関しても、多様な場合（例、主節[2]と様々な従属節[5][7],(4)(5)）で、変化が進行中である。ただし、(5)の[1]のような、状態を事実として提示する構文環境では、現在も、「お\blacksquare」だけが使われており、本変化の波が及ぶ兆しはない。

(5) 熊本市で使用した調査票の例文、[1][2][5][7]は質問票上の番号

[1]a./b. あの子、さっきから {寝と\square} /寝と\blacksquare (=寝とう)} よ。

[2]a./b. 今日は家でゆっくり {休んど\squareう /休んど\blacksquareう} !

[5]a./b. もっと早くから {並んど\squareば /並んど\blacksquareば} よかったわあ。

[7]a./b. ケーキは、イチゴが {載っと\squareば載っと\blacksquareば} いーと !

地域差をうかがうべく、熊本市（2009年7月）と岡山市（2009年12月）において(5)の各構文文脈について、大学生対象のアンケート調査を行った（山部 2010: 105-106）。それぞれ、九州北部（熊本市、大分市以北）出身者 n=100、岡山県出身者 n=108 による回答を集計した。各構文文脈における「お\square」と「お\blacksquare」の相対的勢力を示すべく、次の値（ \forall ）を算出した。

K:「お\square」の例文を回答者自身が“言う”とする回答数、R:「お\blacksquare」の例文を“言う”とする回答数。“まれに言う”は“言う”の回答数 0.5 と数える。

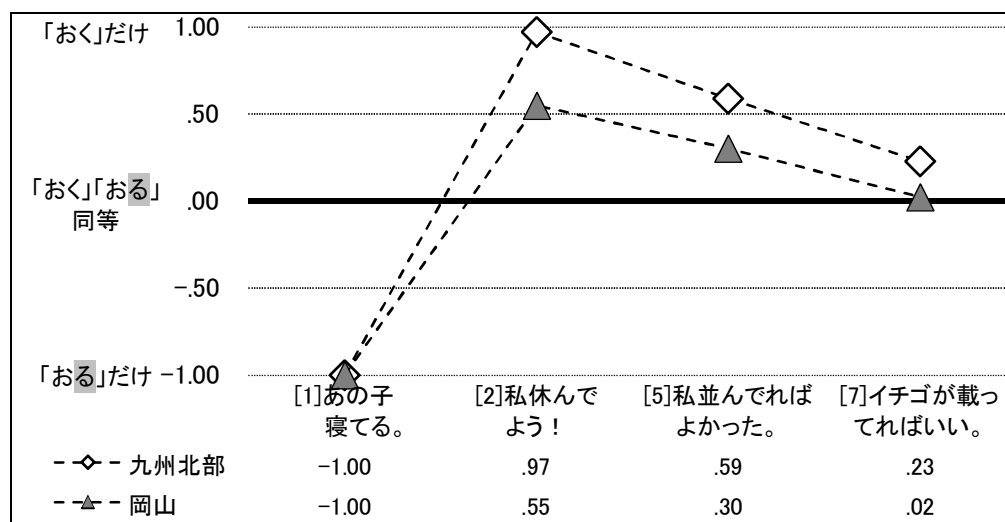
$$\forall = (K - R) \div (K + R)$$

当該の構文環境（例、(5)の[7]）において、「お\square」「お\blacksquare」の両方について“言う”と回答することも可能で、実際にもそのような回答は少なからず得られた。 \forall の値は最小-1から最大+1の間で変異する。例えば、(グラフ(6)での[1]の◇と▲のように)ある文脈について \forall の値が-1であれば、その文脈では「お\blacksquare」だけが使われる。また、([7]の▲のように)ほぼ0で

あれば、そこでは「おる」を言う回答と「おく」を使う回答が同数である。

グラフ(6)に示されように、 Ψ の値は、構文文脈[2][5][7]のいずれにおいても、九州のほうが中国地方より大きい。つまり、「おる」から「おく」への通時的変化は、九州のほうが中国地方より先の段階へ進展している。

(6) グラフ：補助動詞「おく」「おる」の相対的勢力



(山部 2010 : 106)

本稿では、非意志的状态について望ましきの解釈が強制される場合に注目していく。この場合、九州北部では「おる」は弱く排除される ((4)の評定 { \square / \triangleright ?れ} ?印、(6)の構文環境[7]について◇の値がプラス ($\Psi = .23$))。一方、岡山では同様な偏向は見られず、「おる」と「おく」は同じ程度に好まれる ((6)[7]▲の値が約 0 ($\Psi = .02$))。

(4)に示す適格度の評定は、私 (1965 年、福岡市生まれ) によるものであるが、調査できた範囲 (情報提供者と質問項目に関して網羅的ではない) に関しては九州北部出身の大学生の平均値 (山部 2001, 2009, 2010) に相当する。例えば、(4c)の評定と[7]の◇の値は対応している。また本稿全体にわたり、(アンケート調査における評定の統計値を付した例文(21),(51aii)(51bii)は除き) 全ての例文について、適格性の評定は私によるものである。それらは(4)に示した判断をする話者に共有されていると見込まれる。

3 否定条件形

否定条件形「～ないと」などは、形式的に否定形態素「ない」を含む。しかし、ある場合に意味的に否定の働きが見えなくなる。その様子を観察し (3.1)、理由を考察する (3.2)。

3.1 否定条件形が意味的に述語否定である場合と、そうでない場合

(7a)のように、単文においては、形式上で動詞に否定辞が後続していると、意味的には動詞が表わす述語が否定される。それに応じて、否定極性表現「何も」が現れることができるが、存在を肯定する表現「何か」は現れない。(より厳密に言うと、「何か」が現れないのは、これが「ない」の意味的作用域の“内”にあると解釈しようとするときである。「何か」が「ない」の意味的作用域の“外”にあるという解釈は適格である。例えば、例文(7a)で、「何か」を使うと、食べるのを控えたものが何か存在する、という意味が表わされる。) (7a)とは反対に、(7b)のように、節内部に否定辞「ない」がない場合は、「何も」は許されず、「何か」だけが可能である。

- (7) a. 昨日は一日中 {何も/#何か} 食べなかった。
b. 昨日は一日中 {*何も/何か} 食べた。

(8)のような否定条件節は、否定辞「ない」を含む節の1種であるが、上述の一般化の例外である。ここでは、「何も」と「何か」のどちらも可能である (Hasegawa 1991: 284, McGloin 1976: 416)。どちらを使っても文は真理条件的には同義である。つまり、同じ状況を描く。(9)のような「～なければならない。」「～なきゃだ。」は、否定条件節を含む表現の1種であるが、そのさらなる例外である。ここでは「何か」のみが可能である²。

- (8) a. {何も/何か} 食べなければお腹すくよ。
b. {何も/何か} 食べないと腹すくよ。
c. {何も/何か} 食べなくてはだめですよ。(8c=McGloin 1976: 416, (139d))

² (8)(9)で適格として提示した例文のうち、例文(8c)(9b)をめぐる話者間変異がある。私自身は適格と判断しない。しかし、そのことで本稿の論旨が影響を受けることはない。

(8c)に関しては、私にとって、否定条件形「～なくては(なくちゃ)」は、「何か」とは容易に共起する一方、「何も」とは共起しづらい。本稿の以下では「～なくては」は取り扱わない。本稿全体の議論にとって肝要なことは、「～んと(～ないと)」(また、8.1の議論にとって「～なければ」)について、「何か」と「何も」いずれも共起するという観察だ。

(9b)に関しては、否定条件形の直後に「だ」やその変化形を後続させた表現(例、「勉強しなきゃだ。」「行かなければだった。」「見なきゃです。」)は、私は使わない。一方、インターネット検索では多数の使用例が検出されることから、広い話者層にくださった言い方として普及していると見てよい。この話者間変異は、「～なきゃだ」などの言い方を熟語的な語彙項目として各話者が持っているか(馴染んでいるか)どうかによる。

- (9) a. {*何も／何か} 食べなければなりません。(9a=McGloin 1976: 416, (140))
 b. {*何も／何か} 食べなきゃだ。

(8)(9)の対比を、本稿で扱う方言で否定条件形「～んと」使って示すと、(10)(11)のようだ。

- (10) {何も／何か} 食べんと おなかへるよ。
 (11) {*何も／何か} 食べんと！

これらの観察のうち(8)-(11)における「何も」の可否については、McGloinの知見を援用して次のように説明できる³。文(8)(10)は、条件節内に述語否定の意味が含まれる。その節内に「何も」が現れることができる。これに対し、例文(9)と(11)では、「～なければならない」「～なきゃ(だ)」は、それぞれ全体として事態の望ましさを表す熟語すなわち1個の語彙項目として解釈されるしかない。例えば(9a)については次のようだ。連鎖「なりません」は、自立性がなく必ず複合的項目の一部をなす（「*なりませんよ。」は文をなさない）、さらにそれを含む複合的項目は特定の数点に限定される（「～なければならない」「～なきゃならない」はあるが、「*～なかったらならない」「?～ないとならない」はない）。つまり、否定条件節と「なりません」の組み合わせには、合成的なしかたで解釈されるための素材が揃っていない。否定条件節の内部で述語否定という意味的構成要素を読み取れない。ゆえにその節には「*何も」が現れない。

(9)(11)と一見似た事実だが、別段に指摘する必要があるのが、(12)に示される事実だ。(12)の「いけん(いかん)」は、(9)(11)の「*なりません」などと異なり、自立性がある(OK「いけんよ。」OK「いかんよ。」。)にもかかわらず、これも不可避免的に語彙的項目「～んといけん」の一部として解釈され、「～んと」と「いけん」を合成的に解釈できない。ゆえに否定条件節に「??何も」が現れない。

- (12) {??何も／何か} 食べんと いかん／いけん よ。

³ 3.1の説明は、連鎖「～なければならない」「～なきゃだ」「～んといかん」が熟語をなすという事実
 に理由を求める点で、McGloinと基本的な考えかたを共有している。

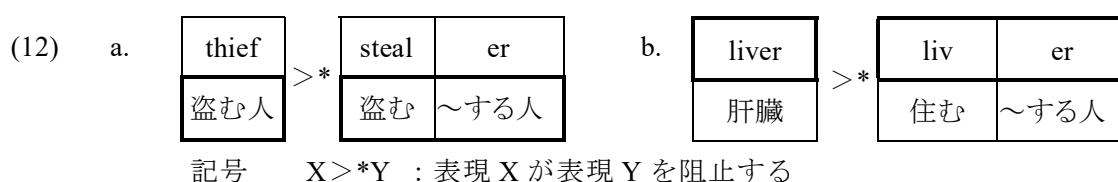
強く熟語的に<have to>の意味を含意する表現(例、なければならない)においては、「～も」は現れない。...これは、おそらく[本稿の例文(9)]が、否定の全くない文と、論理的に同義であるからだろう。だとすれば、これらの熟語的表現においては、「～も」の出現は、文の論理的同義関係に反応するようだ。(McGloin, p.418)

否定条件形は、(9)-(11)のように「～なければならない」「～んといけん」のような熟語の構成部分をなす場合、述語否定の意味を表わさなくなる。そのとき表わされるのは、第2節で言及した意味、事態の望ましさだ。この意味変容は、(8)(10)において「何か」が現れた場合にも生起している。第4節以下では、これが他の場合に起こる様子を観察していく。

3.2 阻止

3.2 では、例文(12)について理論的な疑問を提起し解消する。ここでの考察結果は第9節での問いでも利用することになる。3.1 では(12)で「何も」が不可能である事実を指摘し、文法体系内に熟語的な語彙項目があることに応じて合成的な解釈が排除されるのだ、と記述した。では、なぜそうなるのか、つまり、熟語的な語彙項目が文法体系内に存在する場合に、文を解釈しようとする、なぜそれら熟語的な語彙項目によることが強制されるのか。以下、これの理由説明として、阻止 (blocking) という事象が起こっている、と論ずる。議論の中で、提示する説明が阻止についての先行研究に見られるある主張と抵触することを指摘し、それを解決するため阻止についての了解の修正を示唆する。

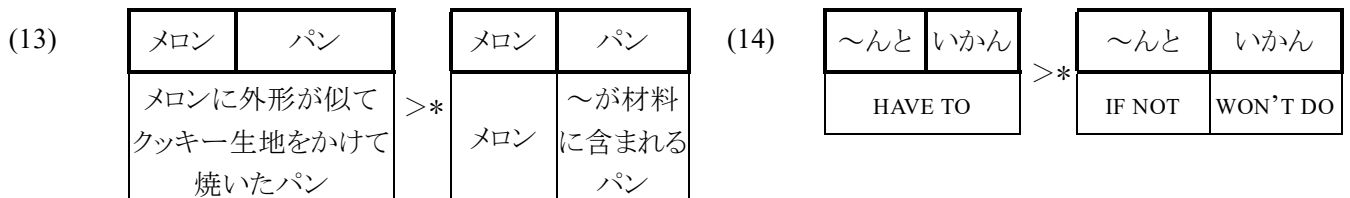
blocking とは次のような事象だ。2個の表現を複合させて新たな表現を創作しようとするさいに、目標の表現と (i) “同じ意味”、あるいは、(ii) “同じ形式” の表現が、すでに辞書項目として存在していると、目標の表現を作ることができない。これら2種類の場合のうち、場合(i)は **synonymy blocking** (同義による阻止)、場合(ii)は **homonymy blocking** (同音による阻止) と呼ばれる。場合(i)の事例は容易に見つかる。例えば、英語では、(12a)のように、盗む人という意味に対しては形式 thief という形態素がすでに存在するので、同じ意味のために2個の形態素 steal(盗む), er(する人)を組み合わせる複合的な表現(語彙素)を新たに作ることができない。一方、(ii)の場合については、一部の研究者によって、該当例の存在が疑問視されている (Plag 2003: 63-64)。該当例の候補の1つは、(12b)のように表わせる。liver という形式に対しては肝臓という意味の形態素がすでに存在しているので、live(生きる), er(する人)を組み合わせる同じ形式の複合的な表現(語彙素)を新たに作れない。しかし、Plagによると、homonymy blocking によって不適格になるとされているこの事例や他の同種の事例は、実際には適格である。homonymy blocking は、これを支持する確実な具体例は存在しない。したがって事象として実在しない、という。



さらに、ゼロ接辞による派生、すなわち、転換 (conversion) においても、homonymy blocking は文法的原理としては機能しているような効果が観察できない、という指摘がある (Neff 2005:124-126)。例えば、ドイツ語において、名詞 Krieg (戦争) から動詞 kriegen (戦争を行う) を創作しようとするれば、既存の動詞 kriegen (獲得する) が存在するにもかかわらず、可能である。kriegen を戦争を行うという意味で解釈することは、著者の判断によれば問題ないという。これを 1 例として同様のドイツ語の例が合わせて 16 例あげられている。

本稿による「～んといかん」(12)に関する説明は、(ii) homonymy blocking に分類されることになる。そこで、「～んといかん」は、Plag や Neef の懐疑論の根拠となっている liver (住む人) (12b)や kriegen (戦争をする) のような事例から差別化する原則的理由を明らかにしなければならない。本稿は次のように考える。homonymy blocking は、2 表現が単に同音であることによって引き起こされるのではなく、発動範囲はそれより狭く限定され、2 表現が同一アイテムから構成されていることによって引き起こされる。少なくとも、後者の場合に強い効果を発揮する。したがって、(12b)は homonymy blocking の影響を免れる。

Homonymy blocking の影響を受ける事例は、(13)や(14)である。(13)は語における (すなわち形態論の) 事例であり、(14)は文における (すなわち統語論の) 事例である。後者は我々がいま説明しようとしている事例である。



複合語「N1+パン」は、2 形態素を組み合わせた表現であり、複合語「N1+N2」一般と同じく合成的に意味解釈が行われ、N1 は形状 (～に似た形の) あるいは材料 (～が材料に含まれる) などと了解することができる。ところが、(13)の複合語「メロンパン」は、構成単位「メロン」と「パン」からなる語彙項目として登録されてされている。それに応じて、これと同一の構成単位を発話の場で組み合わせる合成的な過程は阻止される。事実として、それを聞いてメロンが材料に含まれるパンだと解釈することが困難である(15)。なお、複合語の片方の構成単位が「コッペ」のように非自立的であれば、阻止の作用があろうとなかろうと、複合語の全体的解釈しかない。

(15)	解釈	形状	材料
		たまごパン	OK
		スイカパン	OK
		メロンパン	OK(全体的解釈)
		コッペパン	OK(全体的解釈)

熟語「～んといかん」も、構成単位「～んと」と「いかん」からなる語彙項目として登録されている。それに応じて、これと同じ構成単位を発話の場で統語的に組み合わせる合成的な過程は阻止される。それを聞いて述語否定（「ない」が動詞に係る解釈）などの意味的要素に分解して解釈することは困難だ(16)。なお、熟語の片方の構成単位が「ならない」「だ」のように非自立的であれば、阻止の作用の有無とは関係なく、熟語全体に対して全体的解釈を施すしかない。

(16)	解釈	望ましさ	述語否定
		～んと困る	OK
		～んとダメ	OK
		～んといかんいけん	OK(全体的解釈)
		～なければならぬ	OK(全体的解釈)
		～なきゃだ	OK(全体的解釈)

以下、第4～7節では、否定条件形「～ないと」を含む文における諸事象を観察しながら、「～ないと」の両義性を例証していく。

4 「何か」「何も」と補助動詞「おく」「おる」の共起

非意志的な永続的状态（ケーキにイチゴがのっている）を、「～んと」の否定条件節に埋め込むと、例文(17)が得られる。

(17) ケーキに イチゴが のってないと、 さびしい感じになる。

この文の条件節では、(18)のように不定代名詞「何か」「何も」の両方が可能である。((10)のように、意志的な動作が描かれている事例でも、「何か」「何も」の両方が可能である。)

(18) ケーキに 何か／何も のってないと、 さびしい感じになる。

例文(17)を本稿の方言に訳すと、例文(19)になる。補助動詞は「おく」「おる」の両方が可能である（例文(4a)も参照せよ）。

(19) ケーキに イチゴが のっと {か/ら} んと、さびしい感じになる。

不定代名詞「何か」「何も」と補助動詞の共起に関しては、例文(20)(21)のようだ。2つの代名詞の違いに対応して、2つの補助動詞「おく」「おる」が（おおよそ）相補分布なす。すなわち、(20)の(a)のように「何か」があるときには、「おく」が現れ、「おる」があまりよくない。反対に、(b)のように「何も」があるときには、「おる」が現れ、「おく」は不可能である。不定代名詞・補助動詞が異なっても、文の意味は真理条件的には同じだ。

(20) a. ケーキに 何か のっと {か/?ら} んと、さびしい感じになる。

b. ケーキに 何も のっと {*か/ら} んと、さびしい感じになる。

なお、“おおよそ”の相補分布というのは、「おる」で「何か」が排除される強さ(?)は、「おく」で「何も」が排除される強さ(*)よりも緩い。この非対称性は、本稿をつうじて以下見ていく様々な事象に関して繰り返し現れる。

(20)と同様の例文について、岡山の大学生の判断を統計的に示すと、次の(21)のようである。「何か」があれば「おく」と「おる」の両方が現れ(¥=.01)、「何も」があれば「おる」が現れるが「おく」はほとんど現れない(¥=-.63)。(¥の値の算出方法は第2節を参照されたい。2009年6月にアンケート調査実施、岡山県出身者の回答を集計、n=112) (括弧内の数字は、「おく」/「おる」それぞれについて“言う”という回答、および、いずれか少なくとも一方を“言う”とする回答の割合(%))。

(21) A 子さん：ケーキは、フルーツが上に乗っかってるのに限るね！ほんのちょっとでもいいから。

B 美さん：ほんと、そうだね！

a. 上に ^{なん}何か のっと {か/ら} んと、見た目、^{いろどり}彩りがパッとせんもんな。
¥= .01 (か=77/ら=75, いずれか=97)

b. 上に ^{なん}何も のっと {か/ら} んと、見た目、^{いろどり}彩りがパッとせんもんな。
¥= -.63 (か=17/ら=75, いずれか=78)

(20) 九州北部（私を含む）と(21) 岡山の間が目立った違いは、(a)「何か」がある場合に「おる」が「お<」に比べて劣勢になるか（九州北部）／ならないか（岡山）かである。この方言差のために、岡山(21)では、(a)の構文環境で、補助動詞「お<」「おる」は両方現れ相補分布をなすに至らない。この方言差は、第2節で見た次の事実と、同じ経緯によるものだ。(4)の各構文環境や(5)(6)の構文環境[7]のように、事態の望ましさを解釈が強制される場合には、九州北部では「おる」はいくぶん排除される（(4)では?印、(6)の構文環境[7]について◇の値がプラス）が、岡山では「おる」はその制限を受けず「お<」と同じ程度に好まれる（(6)[7]▲の値が約0）。(20)(21)の(a)のように「何か」と共起するときも、そのような場合に該当し、並行的な方言差が観察される。

以上の2方言に対して、標準語の対応する例文(18)においては、「何か」と「何も」とで違えても一貫して補助動詞は「いる」が承けていることに留意されたい。

(20)において見られる（および(21)において不完全な形で見られる）補助動詞「お<」「おる」の相補分布を、(b),(a)の順に、説明していこう。まず、(20b)（および(21b)）のように、「何も」で始めると「お<」は不可能だという事実についてはこうだ。文中にある「何も」を認可するために、否定条件形「～んと」は意味的に述語否定を表わしている。「～んと」は、述語否定を表しているとき、事態の望ましさを表さない。（この文全体からは事態（ケーキにのっている）が望ましいことが了解されるが、明示的意味の一部として望ましさが含まれているわけではない。）すなわち、このとき「～んと」は「お<」を許可できる働きに就いていない。

(20a)のように、「何か」で始めると「おる」があまりよくないという事実については、次のように説明できる。「何か」があると、「～んと」は否定を表すことはできない。なぜなら、「何か」は否定のスコープ内に入って非存在を表わせないからだ（例文(7a)を参照）。したがって、「～んと」は、事態の望ましさを表わす用法にあるとしとか取れない。事態の望ましさを構文環境においては、一群の話者たちにとって、「おる」は排除される。

ここで“一群の”話者という但し書きを加えているのは、(a)のような構文文脈における「おる」の文の評定に関して、話者間に変異が見られるからだ。ここで「おる」が「何か」と共起するかについて、(20a)では私による評定(?)を示してあるが、私の評定は、第2節の末尾で述べたように、九州北部の大学生の変異範囲の中間位置に当たると見込まれる。

5 数量詞「ほとんど」と否定「ない」の相対的作用域

数量詞「ほとんど」と動詞の否定「ない」の相対的作用域は、単文においては、必ず、「ほとんど」が「ない」よりも大きい作用域を取る。すなわち、意味は部分否定（ほとんどではない）とは取れない。この制限は、助詞を「は」「が」などと変えてみても、変わらずに成り立つ。（このようなふるまいを見せる数量詞には、「ほとんど」の他に、「大部分」「少し」などがある。加藤 2003 : 176 など。）例文(22)は、(i)『ほとんど>ない』（全問不正解と同然だった、悪い成績）のように一義的に解釈され、(ii)『ない>ほとんど』（全問正解に近いところまで届かなかった、かなりよい成績）のように解釈できない。

(22)	(i)	(ii)
ほとんどの問題が分からなかった。	OK	*

否定条件節においては、今仁（1993: 204）が指摘するように、数量詞「ほとんど」と否定「ない」の相対的作用域は入れ替わりが可能である。例えば、例文(23)は、次のように両義的である。(i)『ほとんど>ない』（全問不正解に近い場合には、不可になる）とも取れるし、(ii)『ない>ほとんど』（全問正解に近くない場合には、不可になる）とも取れる。試験の合格基準点は、前者の解釈によれば低く、後者の解釈によれば高い。

(23)	(i)	(ii)
ほとんどの問題が分からないと、不可になる。	OK	OK

否定条件節において補助動詞が現れる場合を見てみよう。これら2種類の相対的作用域は、「お<」く「お<」るとの共起に関して（おおよそ）相補分布をなす。(24)の例文の意味解釈は次のようだ。(24a)「お<」くが現れた例文については、一義的に(ii)『ない>ほとんど』（全問正解に近くないと、ダメだ）になる。(24b)「お<」るが現れた例文については、場合、一群の話者たちにとっては、一義的に(i)『ほとんど>ない』（全問不正解だと、ダメだ）となる。(24)の(a)と(b)とでは、使われる補助動詞は「お<」くと「お<」るとで相違するが、描出される事態・アスペクトはいずれでも非意志的状态（問題が合っている）であって同一であることに留意されたい。意味的相違は量化の点にある。

- | | | | |
|------|----------------------------------|-----|------|
| (24) | | (i) | (ii) |
| a. | ほとんどの問題が 合っと \square んと、不可になる。 | * | OK |
| b. | ほとんどの問題が 合っと \square んと、不可になる。 | OK | ? |

なお、標準語における対応する例文(25)では、補助動詞「いる」が使われ、数量詞と否定の意味的作用域は両方が可能である。この理由は、例文(23)でそうなのと同じだ。

- | | | | |
|------|-------------------------|-----|------|
| | | (i) | (ii) |
| (25) | ほとんどの問題が 合っていないと、不可になる。 | OK | OK |

(24)の(a)と(b)に見られる相補分布は次のように説明できる。

(24a)のように「お \square 」が使われたときは、否定条件形「～んと」は、(26)の(a)のように、命題事態の望ましさを表わしており、述語否定を表わしていない。例文の全体は、(b)のように解釈されており、「ほとんど」を含む節内には、否定はない。(b)では、「ほとんど」の節に対応する意味的単位を[括弧]で囲んである。否定が解釈される構造的な位置は、「ほとんど」の節よりさらに上位である。解釈過程においては、「ほとんど」の節の解釈が完了した後には否定が解釈されしか余地がなく、相対的意味関係は『ない>ほとんど』となる。

- | | |
|------|------------------------------------------------------------------------|
| (26) | 望ましさ |
| a. | 否定条件形「～んと」
～であることが必要だ。さも <u>ない</u> と... |
| b. | 「お \square 」の例文(24a)
[ほとんどの問題が合っていることが必要だ。] さも <u>ない</u> と、不可になる。 |

(26)の意味は意味的要素として否定(ない)を含んではいるが、それは形態素「ない」が付加している述語(合っている)に作用するのではない。

(26)に示した分析は、例文(24a)を意味的に例文(27)になぞらえるものだ。(27)では、「ない」は形式的に「ほとんど」の節の外部にある。このことを直接に反映して、「ほとんど」の節の解釈が完了した後に、否定「ない」が解釈過程に取りこまれる。

- | | |
|------|----------------------------------------------------------|
| (27) | [ほとんどの問題が合っている] わけで <u>ない</u> 。
(*ほとんど>ない、OK ない>ほとんど) |
|------|----------------------------------------------------------|

(24b)のように「おる」が使われたときは、否定条件形「～んと」は、(28)の(a)のように、述語否定を表わしており、望ましさを表わしていない。文全体は、(b)のように解釈される。この文では、否定の意味成分は、「ない」が付加している述語（合っている）に作用している。「ほとんど」と否定は形式的のみならず意味的にも同一節内にあり、例文(22)と並行的なしかたで『ほとんど>ない』と解釈される。

(28) 述語否定

a. 否定条件形「～んと」

～でないという場合 …

b. 「おる」の例文(24b)

[ほとんどの問題が合っていない] という場合、不可になる。

6 並列の「も」「か」と否定「ない」の相対的作用域

6.1で「も」、6.2で「か」を取り上げる。

6.1 「も」

例文(29)は、「も」で並列された2項を含む。この文の動詞に否定辞「ない」を付けると例文(30)になる。ここでは、「も」(両方)」と「ない」(否定)の相対的作用域は、一義的に(i)『も>ない』(両方が欠けている)になり、(ii)『ない>も』(両方入っているわけではない)にはならない。さらに、否定文(30)を条件節に埋め込むと、(31)になる。ここでは、「も」と「ない」は相対的作用域を入れ替えることができる。(i)『も>ない』(両方が欠けていると、もの足りない)だけでなく、(ii)『ない>も』(両方入っているのではないと、もの足りない。)が可能である。

(29) カレーに ニンニクも生姜も 入ってる。

(i) (ii)

(30) カレーに ニンニクも生姜も 入ってない。 OK *

(31) カレーに ニンニクも生姜も 入ってないと、 OK OK
やっぱ味がもの足りない。

(31)において、解釈(i)『も>ない』が生じるのは、否定条件形「～んと」が(28)述語否定の表わすときである。最小の節の内部に否定の意味がある。そうすると、例文(30)におけるの

と同じしかたで、「も」(両方)が否定を被る。解釈(ii)『ない>も』は、否定条件形が(26)望ましさを表わすときに生じる。否定は最小の節内でなくその外にある。

例文(31)を本稿の方言に移すと、(32)のようになる。補助動詞が(32a)「お<」と(32b)「お<」とで違いによって、作用域に関する解釈が違ってくる。(32a)「お<」のときは、(i)『も>ない』(両方が欠けていると、もの足りない)となり、(ii)『ない>も』(両方入っているのではないと、もの足りない。)となる。(32)における適格性の分布は、(24)でのそれと同じパターンをなしていることに留意されたい。

(32)		(i)	(ii)
a.	カレーに ニンニクも生姜も 入っと<んと、 やっぱ味がもの足りん。	*	OK
b.	カレーに ニンニクも生姜も 入っと<んと、 やっぱ味がもの足りん。	OK	?

この事実が生じる仕組みは次のようだ。(32a)のように補助動詞「お<」が生起するときは、否定条件形は(26)のような意味を表わす。最小の節内部に否定はないので、(ii)のように、2項からなる並列表現は否定の作用から免れる。(32b)のように補助動詞「お<」があるとき、否定条件形は(28)のような意味を表わす。最小の節内部に否定があるので、例文(24)と並行的解釈され、したがって、(i)のように両項ともが否定される。

6.2 「か」

例文(33)は、「か」で並列された2項を含む。動詞に否定「ない」を付加すると例文(34)になる。ここでの「か」(一方)と「ない」(ない)の相対的作用域は、一義的に (i)『か>ない』(一方が欠けている)になり、(ii)『ない>か』(一方さえ入っているとは言えない。両方が欠けている)とは取れない。否定文(34)を条件節に埋め込むと、例文(35)になる。ここでは、(i)『か>ない』(一方が欠けていると、ダメ。両方が必要だ)に加えて、(ii)『両方が欠けていると、ダメ。少なくとも一方が欲しい。』も可能である。

(33)	このコーヒーは、砂糖かミルクが 入ってるな。		
		(i)	(ii)
(34)	このコーヒーは、砂糖かミルクが 入ってないな。	OK	*
(35)	あたし、砂糖かミルクが 入ってないと、やっぱコーヒーはダメだわ。	OK	OK

例文(35)を本稿の方言に訳すと、(36)のようになる。補助動詞が(36a)「お^く」と(36b)「お^る」の違いによって、作用域に関する解釈が違って来る。違い方は(32)と並行的である。(i)『か>ない』(一方が欠けていると、ダメ)、(ii)『ない>か』(両方が欠けていると、ダメ)。

(36)		(i)	(ii)
a.	あたし、砂糖かミルクが 入っ ^か んと、やっぱコーヒーはダメ。	*	OK
b.	あたし、砂糖かミルクが 入っ ^ら んと、やっぱコーヒーはダメ。	OK	?

7 等位節と否定「ない」の相対的作用域

等位節においては、前の節は、後ろの節の動詞に付く否定辞「ない」によって否定されることはない。

(37) ゴリラが [リンゴを食べ & 水を飲まなかつ] た。(平田 (14a))

平田 (2010) の解説を引用すると：

[(37)]の文の左の等位節は、時制辞前にある否定辞「ない」のスコープから外れている。言い換えれば、[(37)]の左の等位節は、...「ゴリラがリンゴを食べた」という解釈を持ち、...左の等位節が否定辞のスコープに入った「ゴリラがリンゴを食べない」という解釈にはならない。(p.85)

この例外が否定条件文である。平田によれば論文査読者の指摘として：

条件節内であると、左の等位節が否定のスコープに入った解釈が可能となる話者もいるようである(査読者の指摘による)。...[次の(38)]のような例で「水を飲み」と「食物を取ら」の両方を否定する解釈が得られるようである。(p.86)

(38) 私たちは、水を飲み、食物を取らないと、死んでしまう。

本稿では、実際にはこのような解釈は広い層の話者にとって可能であると見なす。以下の例文について示す判断は、そのような話者による判断だと見込まれる。

例文(37)の等位節と同様に、例文(39)の等位節においても、前の節は後ろの節の動詞に付く否定辞「ない」によって否定されることはない。(39)で言及されているかばんは、容量の大きいかばんである。(37)と(39)の相違は、描写される状況が、前者が動作(飲む、取る)

を表わし、後者が永続的状态（大きい、持ち手が付いている）を表わすという点である。

(39)	前の節が否定スコープの	外	内
	このかばんは、容量が大きくて、持ち手がついていない。	OK	*

(39)を否定条件節に埋め込むと、(40)のようになり、(38)と同様に2種類の解釈が可能である。前の節が否定の作用域の“外”にある解釈によれば、持ち手が付いてない大きいかばんは、使いにくい。前の節が否定の作用域の“内”にある解釈によれば、かばんは、容量が大きくないと使いにくいし、また、持ち手が付いてないと使いにくい。“内”の解釈で注目すべき点は、前後の節の述語の品詞が形容詞と動詞とで相違しており、形式的には連鎖「*大きくてない」「*大きくていない」を作ると不適格になるにも関わらず、意味的には例文(39)で〈大きい〉が否定のスコープに入っていることである。

(40)	前の節が否定スコープの	外	内
	かばんは、容量が大きくて、持ち手がついていないと、使いにくい。	OK	OK

本稿の方言に移すと、補助動詞「おく」と「おる」とで、解釈が異なる。異なり方は、これまで（第5,6節）と並行的である。

(41)	前の節が否定スコープの	外	内
a.	かばんは、容量が大きくて、持ち手がついと <small>か</small> んと、使いにくい。	*	OK
b.	かばんは、容量が大きくて、持ち手がついと <small>ら</small> んと、使いにくい。	OK	?

8 両義的構造が観察されるための諸条件

第4～7節の議論をとおして、否定条件文のある事例については、2種類の意味(26)望ましと(28)述語否定のどちらでも解釈することが可能であることが分った。それでは、否定条件文の種々の事例についても両方の意味が可能であるのか、それともどちらか一方のみ可能なのか？ それは、否定条件形の種類によって、条件文後件の意味的特徴によって統制される。8.1では4種の否定条件形、8.2では条件文後件の意味的特徴、という基準によって場合分けして事実観察を行う。第2と4～7節で利用したテストをここでも利用する。

8.1 否定条件形の種類

8.1 では、4種類の否定条件形を対比する。2つの意味(26)望ましさと(28)述語否定のうちどちらが可能かについて結論を一覧にすると、表(42)のようである。

(42)	否定条件形の意味	(26)	(28)
a.	～んと (～ないと)、～なければ	✓	✓
b.	～なかったら	?	✓
c.	～ないなら	*	✓
d.	～な (私の個人語における)	✓	*

用法(26)と(28)の間の両義性が成り立つのは、否定条件形のうち、(42)の(a)にあげたもの(「～んと」(標準語「～ないと」)および標準語「～なければ」)についてである。(b)(c)にあげた否定条件形「～なかったら (～なかったら)」と「～んなら (～ないなら)」については、(28)述語否定の用法が可能であるが、(26)望ましきの用法は、前者ではかなり困難で、後者ではさらに困難だ。(d)の非標準語形の否定条件形「～な」については、私の個人語では、(26)望ましさを表わす用法があるが、(28)述語否定を表わす用法はない。(「～にゃ／な」形の用法範囲に関する地域的変異については、注5および6を参照されたい。)

以下では表(42)に示した論点を例証していく。

まず、(26)望ましきの用法が可能であるかどうかに関して、4種の否定条件形を対比しよう。まず、標準語で、方言形(d)「～な」除く3種(a)～(c)について、例文を(43)を示す。これら例文は同じ状況を描いている。条件節の事態は、これまでと同様、非意志の永続的状态(オマケが付いている)である。

- (43) a. オマケが 付いてないと、誰も買わないよ。
 b. オマケが 付いてなかったら、誰も買わないよ。
 c. オマケが 付いてないなら、誰も買わないよ。

(43)を本稿の方言の言い方に移すと、(44)のようになる。否定条件形の種類によって、補助動詞「お\square」「お\blacksquare」が使い分けられる(第2節、および山部2001,2002)。補助動詞「お\square」は、(a)否定条件形「～んと」と(d)「～な」では、可能であるが、(b)「～なかったら」ではあまりよくなく、(c)「～んなら」では全く不可能である。このことは、命題事態の望ましさを表わす用法は、(a)(d)にはあり、(b)では弱く、(c)にはない、ということを示す。一

方、「おる」は、(d)においては、私にとっては (?印の程度に) あまりよくない (九州北部の話者による評定の統計値もこれに呼応している。第2節末尾を参照)。

- (44) a. オマケが 付い {と^かんと／と^らんと}、誰も買わんよ。
b. オマケが 付い {?と^かんかったら／と^らんかったら}、誰も買わんよ。
c. オマケが 付い {*と^かんなら／と^らんなら}、誰も買わんよ。
d. オマケが 付い { と^かな/?と^らな}、誰も買わんよ。

次に(45)で、(28)述語否定の用法の可能性に関して、4種の否定条件形を点検しよう。可能否定極性表現「何も」の生起 (第4節) は、(a)~(c)では可能、(d)では不可能である。これから、(a)~(c)は、述語否定を表わす用法を持つが、(d)は持たない、と分かる。

- (45) a. 授業は 何も 分からないと、面白くない。
b. 授業は 何も 分からなかったら、面白くない。
c. 授業は 何も 分からないなら、面白くない。
d. *授業は 何も 分からな、面白くない。 (dは「何か」であればOK。)

なお、標準語「~なければ」形は、(42)(45)の分類法では、(d)の類ではなく、(a)の類に入る。「何も分からなければ、面白くない」はOK。

(44)の「お^く」で見られる適格性判断のパターン (OK, ?, *, OK) と(45)で見られるパターン (OK, OK, OK, *) は、本稿の他のテストでも見られる⁴。「ほとんど」と否定の相対的作用域 (第5節) に関しては、(46)のようであり、(i)の列は(44)の「お^く」のパターンを、(ii)の列は(45)のパターンを再現している。解釈(i)『否定>ほとんど』(満点に近いというのなければ、不可になる)が可能になるのは、(26)のように、命題事態の望ましさが表わされ、それに連動して否定が最小の節の外側で解釈される場合である。一方、解釈(ii)『ほとんど

⁴ (44d)のように補助動詞「おる」は、(26)望ましさの意味が強制される文脈には、現れにくい (?の評定) (第2節)。(44)の「おる」について見られるパターン (OK, OK, OK, ?) は、(45)におけるパターンとを比較とは、(d)「~な」形のみで適格度が低まるという点が共通である。しかし、現象を生じさせている文法的理由は“やや”相違する。後者(45)に関して「何も」を認可するためには、文脈中に明示的意味として、(28)述語否定があることが必要である。一方、前者(44)に関して「おる」の出現条件は、文脈中の明示的意味として、望ましさがないのであればよく、(28)述語否定がそこにある必要はない。

>否定』(0点に近ければ、不可になる。)が可能になるのは、(28)のように、「ほとんど」が述語否定と同じ節内で解釈される場合である。

(46)		(i)	(ii)
a.	ほとんどの問題が 分からないと、不可になる。=(23)	OK	OK
b.	ほとんどの問題が 分からなかったら、不可になる。	?	OK
c.	ほとんどの問題が 分からないなら、不可になる。	*	OK
d.	ほとんどの問題が 分からな、不可になる。	OK	*

同じ2つのパターンは、並列の「も」と否定の相対的作用域(第6節)についても観察される。(47)のようだ。前段落と同じように説明できる。(i)『否定>も』(本題・ギャグともに理解できるというのでないと、授業は面白くない)、(ii)『も>否定』(本題・ギャグともに理解不可能というのなら、授業は面白くない)。

(47)		(i)	(ii)
a.	授業は 本題もギャグも 分からないと、面白くない。≒(31)	OK	OK
b.	授業は 本題もギャグも 分からなかったら、面白くない。	?	OK
c.	授業は 本題もギャグも 分からないなら、面白くない。	*	OK
d.	授業は 本題もギャグも 分からな、面白くない。	OK	*

この2つのパターンは、等位節における前の節とが後ろの節の述語の否定のスコープに入るかどうか(第7節)についても観察される。(48)のようだ。説明は前段落に同じだ。

(48)	前の節が否定スコープの	内	外
a.	かばんは 本体が大きくて フタが閉まらないと、使いにくい。≒(40)	OK	OK
b.	かばんは 本体が大きくて フタが閉まらなかったら、使いにくい。	?	OK
c.	かばんは 本体が大きくて フタが閉まらないなら、使いにくい。	*	OK
d.	かばんは 本体が大きくて フタが閉まらな、使いにくい。	OK	*

8.2 条件文の後件節の望ましさ

8.2 では、条件文の後件節が描く事態が望ましい場合とそうでない場合とで、対比を行う。

本稿ではこれまで後件節の事態は望ましくないものばかりだった。そうではない事態(以下、短く“望ましい事態”あるいは“よい事態”と呼ぶ)が来ることができるかに関して、(42)の4種の否定条件形を点検しよう。(49)に示されるように、(a)~(c)類の否定条件形では可能だが、(d)類だけ不可能である⁵。

⁵ 否定条件形「～な／にゃ」形に望ましい事態が後続できるかどうか、に関しては、話者間に変異がありそれは地域差と相関する。九州北部ではできないとする話者(私もそれだ)が大多数である一方、岡山ではできるとする話者が多い。

第2節で紹介したアンケート調査にはこれに関する質問が含まれる。熊本市で使用の調査票では質問文は(i)。後件は望ましい事態(いい)。この構文環境において否定条件形は、事態(雨が降る)の望ましさを表わさず、もし適格なら一義的に事態否定(雨が降らない)を表わす。

- (i) 明日は、キャナルシティーに遊びに行きます。天気がよければいいなあ。
- a. 雨が降らんかつたら いいけどなあ。(=降らんやつたら、降らんだつたら)
 - b. 雨が降らんと いいけどなあ。
 - c. 雨が降らな いいけどなあ。(=降らにゃ(あ))
 - d. 雨が降らんどけば いいけどなあ。(=降らんとけば)

九州北部：調査実施2009年7月、第2節の回答者n=100のうち、熊本県(熊本市以北)と福岡県の出身者n=59の回答を集計した。岡山：調査実施2009年12月・2010年1月、岡山県出身者の回答を集計した。n=124。

(ii)に、各例文について“言う”という回答の割合(%)を示す。

(ii)	否定動詞形	九州北部	岡山
a.	んかつたら	93	96
b.	んと (=49a)	59	49
c.	な／にゃ (=49d)	12	64
d.	んどけば	79	9

(iic)「～な／にゃ」形は、この構文環境においては、九州北部ではごく少数の話者によってしか使れない(12%)。一方、岡山では(「～んかつたら」(96%)ほどでないが)多くの話者によって使われる(64%)。

- (49) a. 雨が 降らないと／降らんと／降らなければ、いいけど。
 b. 雨が 降らなかつたら、行けたのに。
 c. 雨が 降らないなら、行くのだが。
 d. *雨が 降らな、いいけど。

(49)の各例文の適格性は、各否定条件形が(28)述語否定の用法を持つかどうか((42)の右列)、を反映している。(d)「～な」形は、(26)望ましきの用法しか持たないので、不可避免的に否定条件節の事態(雨が降る)を望ましいとして提示してしまい、例文(49d)を意味的に不整合にする。これに対し、(a)「～んと」形は、「～んと」形は、(26)望ましきの用法だけでなく(28)述語否定の用法も持ち、後者の用法のときは否定条件節の事態(雨が降る)が望ましいかどうかについては関知しない。例文(49a)は一義的に後者の用法である。

例文に両義性が成り立つ見込みがあるのは、(42)の4類の否定条件形のうち、(a)類の否定条件形が現れている場合に限られる。8.2では、(a)類に集中して事実を見ていく。

次の(50)の(a)では、両義性が成り立っている。ここでは、否定条件形「～んと(～ないと)」に対する後件(困る、誰も買わない)がよい事態であり、そのことに呼応して否定条件節の事態(雨が降る、オマケが付いている)は望ましい事態として了解されうる。ここでは、否定条件形は、(26)望ましきの用法にあるとも、(28)述語否定の用法にあるとも取れる。これに対し、(50)の(b)では、後件(いい、もっと安く買える)がよい事態であり、それに応じて否定条件節の事態(オマケが付いている)は、望ましいとは了解できない。したがって、否定条件形「～んと」の(26)望ましきの用法でない用法—すなわち(28)述語否定の用法—によって提示されるしかない。以下でそのことを例証すべく、統語的事象を提示していく。

(50)	否定条件形の意味	(26)	(28)
a.	オマケが 付いてないと、ダメだ。 ≒(43a)		
	オマケが 付いてなければ、誰も買わないよ。	✓	✓
b.	オマケが 付いてないと、いいのだが。	*	✓
	オマケが 付いてなければ、もっと安く買えるのに。		

提示する例文のバリエーションを増すために、(私の個人語における「～な」でなく)岡山の大学生の間で優勢な方言における「～にゃ／な」を導入したい。これは、(42)の分類で

は、同方言や他方言の「～んと」や標準語の「～なければ」とともに ((d)類ではなく) (a)類に属す (注5を参照)。

否定条件形が(26)命題事態の望ましさを表わす用法になれるかどうかは、非意志用法の「お \square 」の可否から見て取れる (第2節)。「お \square 」は、(51a)のような、後件事態が望ましくない場合に限られ、(51b)のような、後件事態が望ましい場合には現れない (山部 2003: 106)。(51a,b)の(ii)の非標準語形「～にゃ」の例文については、岡山の大学生による回答の統計値を示す。(カッコ)内は“言う”という回答数の割合 (%)。この話者の多くは、(b)(ii)のように後件に望ましい事態 (えーのに、安く買える) を許す⁶。(2007年6~7月にアンケート調査実施、岡山県出身者の回答を集計。n=113。¥の値の算出方法については第2節を参照されたい。)

- | | | |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| (51) | | お \square |
| a. | i. オマケが 付い {と \square んと/と \square んと}、ダメ。 | |
| | ii. やっぱ、ムーミンって、しっぽが{と \square にゃ(あ)/と \square にゃ(あ)}、
可愛うねえなあ。 ¥=.00 (\square =55/ \square =56, いずれか=77) | OK |
| b. | i. オマケとか 付い {*と \square んと/と \square んと}、いいのに。 | |
| | ii. ムーミンって、しっぽが付い {*と \square にゃ(あ)/と \square にゃ(あ)}、
もっと可愛いのに。 ¥=-.52 (\square =18/ \square =57, いずれか=65) | * |

岡山の大学生にとっては、(51a)の(ii)においては、「お \square 」は「お \square 」と同等に好まれる (¥の値 .00 は第2節(5)(6)の構文環境[7]における▲の値 .02 とほぼ同じ)。(51b)の(ii)においては、「お \square 」はほとんど言わない (¥の値は -.52)。なお、(カッコ)内の%の値から、岡山における「～にゃ/な」形に関して次の2点が見て取れる。第一に、(51a)ii)の“いずれか”=77% という値から、7割ないし8割の話者がこの形式を持っている。第二に、(51b)ii)の“いずれか”=65%という値から、この形式を持っている話者のうち約8割が (望ましさの用法で使うのに加え) 事態否定の用法で使う。(51b)ii)“いずれか”=65%という値は、注5(iic)

⁶ (50)の「～にゃ」形の例文を、私の個人語において(42d)「～な」形で訳すと、次の適格性がえられる。(a)の(ii)に対して、{OK と \square な/?と \square な}。「?お \square 」があまりよくない理由については、第2節、(44d)、注4を参照されたい。(b)の(ii)に対して、{*と \square な/*と \square な}。補助動詞の選択と関係なく文は不適格である。これは、私の「～な」は後件事態に望ましい事態を来させないからだ (例文(49d)、注5)。

岡山= 64%と対応している。

(28)述語否定の用法があるかどうかは、否定極性表現「何も」(および「誰も」)との共起が可能かどうかとなって現れる(第4節)。この用法は、(52)から見て取れるように、(a)後件事態が望ましくないものであっても、(b)望ましいものであっても、可能である。

(52)		「何も/誰も」
a.	何も 起こらないと、つまらない。 誰も 気づかなければ、意味がない。	OK
b.	何も 起こらないと、いいのですが。 誰も 気づかなければ、大丈夫だ。	OK

(51)の適格性のパターン(OK,*)と(52)のパターン(OK,OK)は、それぞれ、次の(53)の(i)列と(ii)列においても見られる。(53)では、「ほとんど」と否定の相対的作用域の2種類(第5節)が可能かどうか示してある。解釈(i)『否定>ほとんど』(全員出席に近いというのでなければ、..)と、解釈(ii)『ほとんど>否定』((a) 全員欠席に近いというのであれば、..)。(53)の(a)対(b)に示される対比の事実は、Kato (2000: 83) が報告している。

(53)	(i)	(ii)
a.	ほとんどの人が 気づかないと、ダメだ。 ほとんどの人が 来なければ、意味がない。	OK OK
b.	ほとんどの人が 気づかないと、いーけどなー。 ほとんどの人が 来なければ、大丈夫です。	* OK

(53)で(a)望ましくない後件の例文は、(i)(ii)のいずれのように解釈できる。この事実は、このとき否定条件形が(26)望ましさと(28)否定述語の間で両義的であることの現れだ。(b)望ましい後件の例文は、(i)のよう解釈できず、(ii)のようにのみ解釈できる。この事実は、このとき否定条件形が(26)望ましさの意味ではありえず、一義的に(28)述語否定の意味であることの現れだ。

(53)と同じ2パターンは、(54)のように、並列の「も」と否定の相対的作用域の2種類(第6節)についても観察される。前段落と同様に説明される。(i)『否定>も』(子弟のいずれかでも欠席なら、..)、(ii)『も>否定』(子弟両方が欠席なら、..)。

(54)		(i)	(ii)
a.	先生も学生も 気づかないと、ダメだ。		
	先生も学生も 来なければ、意味がない。	OK	OK
b.	先生も学生も 気づかないと、いーけどなー。		
	先生も学生も 来なければ、大丈夫だ。	*	OK

この2パターンは、また、(55)のように、等位節構造において前の節とが後ろの節の述語の否定のスキープの (i)内にあるか・(ii)外にあるか (第7節) についても観察される。上と同様に説明される。

(55)		前の節が否定スキープの	内	外
a.	かばんは 本体が大きくて、持ち手がついていないと、ダメだ。 ≒(40)			
	かばんは 本体が大きくて、持ち手がついていなければ、使いにくい。		OK	OK
b.	かばんは 本体が大きくて、持ち手がついていないと、いいのに。			
	かばんは 本体が大きくて、持ち手がついていなければ、使いやすい。		*	OK

9 まとめ

9.1 では本論のあらすじを繰り返す。9.2 では本稿が先行研究に対してどんな点で知見を加えているのか述べる。9.3 では文法の現況を通時的な視点から俯瞰する。

9.1 あらすじ

否定条件形「～ないと」には、(56)のように、意味的に区別される2つの用法がある。2用法をそれぞれAとBと呼ぼう。用法Aでは、述語否定が明示的に意味される。用法Bは、命題事態の望ましさが明示的に意味される。

(56) 否定条件形の2つの用法

A. 述語否定： ～でないという場合～ =(28)

B. 望ましさ： ～であることが必要だ。さもないと～ =(26)

九州・中四国方言において、次のようなパターンをなす種々の事実を、本稿をとおして繰り返し観察した。

- 同一の、非意志的な永続的状态（例、答えが合っている）を描写するのに、補助動詞「お \square 」「お \blacksquare 」がある。
- この方言では、「お \square 」と「お \blacksquare 」は、相補分布をなす。構文環境が事態の望ましさを表すかそうでないか、で分かれる。
- 構文環境が述語否定を表すかそうでないかによって、相補分布をなす語彙項目ペアや解釈ペアがある。例えば、「何も」「何か」という表現ペアは、相補分布をなす。
- 否定条件形「～んと」の節においては、上記2項の相補分布の一般化の例外であり、4種の表現が全て現れる。しかし、限られた組み合わせでしか現れない。

以上の観察から、次の一般化が導き出される。これが本稿の主張の中核である。

- 否定条件形「～んと」は、A 述語否定を表す表現であることもでき、B 命題の事態の望ましさを表す表現であることもできる。しかし、同時にA,Bの両方を表わすことはない。

(56)の用法A,Bが同一言語内に存在するという一方が他方を阻止しないということなのだが、その経緯がどのように説明されるかについて、ここで補足しておく。3.2では、

(57)=(13)のように、語彙項目「～んといかん」の存在が、即席に「～んと」と「いかん」を合成的に解釈することを阻止する、と考えた。例文(12)のように文中に表現「何も」を加えて、合成的解釈を強制しようとしてもそれができないほどに強く阻止される。

(57) = (13)

～んと	いかん
HAVE TO	

>*

～んと	いかん
IF NOT	WON'T DO

(58)は、否定条件形「～んと」について、2用法 A,B をそれぞれ語彙項目 A,B として表示したものである。語彙項目 A は合成的な解釈で、語彙項目 B が全体的な解釈である。語彙項目 B が語彙項目 A を阻止することはない。例文(21)のように文に「何も」を加えれば、A の意味が一義的に得られる。それはなぜか。

(58)

A.	
～ん	と
でない	という 場合

B.	
～ん	と
であることが必要だ。 さもないと	

次のような経緯による。合成的な解釈の語彙項目 A のほうは、既存である（＝通時的に先行して成立した）。阻止が起こるのは、合成的解釈の語彙項目を新規に生じさせる場合である。したがって、語彙項目 A は阻止の候補にならない。一方、新しく作られたのは、全体的解釈の語彙項目 B のほうである。これも阻止されない。阻止されるのは、新たに生じる表現が合成的解釈である場合である。阻止の起こる(57)=(13)「～んといかん」の場合においては、合成的な解釈は、発話の場で即席に統語的操作によって生じるので、新しく生じるものということになる。

9.2 先行研究

本稿の中核的な主張（前頁の下）は、先行研究に見られる見解を2つの論点で修正する。

第1に取り上げる論点は、否定条件形の否定の意味に関してである。次の(i)(ii)は、それぞれ、(i)あるタイプの否定条件文に関して、(ii)条件文一般に関してである。いずれも、否定条件形（ないし否定条件節）は、望ましさを表わすとき、述語否定も同時に表わしている、と想定している。事実はそうでない。（下記は山部による要約。日本語訳と下線も山部が加えた。）

(i) Fujii (2004)

「早く行かないと 大変だよ／困る。(p.125)」のように、後件節が評価を明示的に表わす述語（大変だ、困る）である構文を、Integrated Evaluative Construction（統合された評価構文）と呼ぶ。この構文の前件節（早く行かない）においては、(a) “述語が文法的に否定 grammatically negated され、条件形マーカーが付いている” (p.136)、そして (b) 事態が “否定的に評価されている” negatively evaluated (p.129 や p.137 の図)。

(ii) 赤塚 (1998)

ある望ましい事態（前件）が起これば、ある望ましくない事態（後件）が起こる、と述べることによって、前件が起こってほしいという心的態度が表わされる。英語の例文：If you eat your spinach, you'll be strong. (p.17) 「ホウレンソウを食べたら、強くなるよ。」。

また、ある望ましくない事態（前件）が起これば、ある望ましくない事態（後件）が起こる、と述べることによって、前件が起こってほしくないという心的態度が表わされる。英語の例文：If you don't eat your spinach, I'll spank you. (p.17) 「ホウレンソウを食べないと、お尻をたたくよ。」

(p.16 など。Akatsuka & Strauss (2000: 特に p.230)は、上述の考え方を反実仮想のタイプの条件文について適用している。)

Fujii (2004)の主張(i)によれば、(b) 否定的に評価されているのは、否定された述語が表わす事態（早く行かない）である。つまり、当該の構文は、評価（本稿でいう望ましさ）と述語否定を同時に意味する、とされている。

赤塚 (1998) では、日本語の否定条件文に関してあげられている例文は、「歯磨かなきゃだめだよ。」(p.70) の“慣用化された条件文”のみである。“慣用化”という用語法に否定の意味要素の消失が含意されているかどうかは不明である。慣用化されていない表現(例、「ごはんを食べなければ、お腹すくよ。」≡本稿(8a)、「チャリは空気が入ってないと、乗り心地がよくない」≡(3b))に適用される余地があるのは、(ii)の後半部分（いわば、“負”の望ましさに関する）だ。これが適用されると考えよう。起こってほしくないという評価が与えられる事態は、否定された述語（ごはんを食べない、チャリに空気が入っていない）である。つまり、否定条件形が（負の）望ましさを表しているときは、同時に述語否定を表わしている、と想定されている。

上の(i),(ii)と同様に、宮部 (2014) においても、「～しないと」節のことがら（および主節のことがら）は“望ましくないものとしてさしだされている”（要旨）と述べられており、これには「～しないと」節のことがらが否定命題だという主張が含意される。

これと対比して本稿の主張を繰り返すと：

- 上段落の例文における否定条件形「～んと」は、両義的であって、両義の一方（本稿の用法 B）の場合には、望ましさを意味し、述語否定を意味しない。両義の他方（用法 A）の場合には、「～んと」は述語否定を意味し、望ましさを意味しない。後者（用法 A）においては、前件事態の望ましさは、「～んと」を含む文全体の意味に基づく推論をとおして了解されるにすぎない。

第2に取り上げる論点は、否定条件形の望ましさの意味に関わる。次の主張(iii)は、上の引用(i)とは別タイプの否定条件文に関して提示されている。

(iii) Fujii (2004)

「早くいかないと 先生にも見放されてしまうよ。(p.125)」のように、後件節の述語（先生に見放されてしまう）が評価を明示的に表わすものでない構文を、**Full Bi-Clausal Conditional construction**（完全二節的な条件構文）と呼ぶ。この構文においては、否定的評価 **negatively evaluated** という談話的機能は、前件節および後件節に含まれることがあるが、同構文にとっては随意的 optional (p.127 本文と図)である。

(pp.125, 127,134 など)

これに対して、本稿では次のことを明らかにした。

- (iii)にあげられているような文において、評価は随意的なのではない。このような文に当てはまる形式の構文が文法体系内に2つ存在し、一方（本稿の用法 B）においては評価（望ましさ）が必ず含まれ、もう一方（用法 A）においては評価が決して含まれないのである。前者（用法 B）では、評価は発話から了解として生じるのではなく、文の構成単位の明示的意味の一部をなす。文の分析に当たってこの意味の有無を知らせてくれる目印になるのが、九州・中四国の補助動詞「お\square」と「お\square」の非意志的用法である。（なお、否定条件形に含まれる評価が、(iii)に述べられているような否定的な評価でなく、望ましさすなわち積極的な評価であることは、前頁

で(i)について指摘した。)

9.3 通時的俯瞰

否定条件形の2つの用法((54)の用法AとB)の通時的な成立過程については、本稿は実証することができない。以下では、言語変化に関して知られている一般原則を当てはめながら、2点を論じる。第1に、用法AとBの間とではどちらがより古いか、という点についてはこうだ。「～んと」「～ないと」の構成を意味的に直接に反映しており、用法Bでは「～んと」全体に意味が与えられている。この事実から、Aがより古い状況を反映したもので、Bがより後の年代に成立したのだと、推定される。第2に、(推定のとおり)AからBへの用法が拡張したのであれば、その動機付けとして、言語使用の場で働くメカニズムの1つ—推論(inference)(Bybee 2006: 61, 2015: 134-135,239)—がこの変化を引き起こした、と説明できる。まず、元来の状況においては、否定条件形は用法Aを持っている(そして用法Bを持っていない)。この段階では、望ましきという内容は、否定条件形が現れる文が実際に発話されるさいに了解されることがら—推論—として得られる。この種の文の発話は日常的にしばしば起こる。このような文が繰り返し生起し、ついには、もともとは否定条件形を含む文(文脈)にしばしば付随する了解だった内容(望ましき)が、否定条件形(語彙項目)の用法Bとして定着するに至った。新しい用法Bは、旧来の用法Aを駆逐することなく、現在の文法体系では両者が共存している。

「～んと」「～ないと」のたどった経過については、英語のbe going toの経過と共通性が認められる。「～ないと」は元来否定(～ない)と仮定(～と)を合成的に意味していたが、be going toは元来は移動(行く)と目的(～するため)の意味を合成的に意味していた(I'm going to see him. 「彼に会いに行くところだ」)。時代とともに、be going toが使用される場で生じる卓越した推論内容(～するつもりだ)が、この連鎖全体が持つ明示的意味となった。新しい意味の用法は古い意味の用法を駆逐せず、現在では2つの用法が共存している。すなわち、I'm going to see himという連鎖は、元来の用法(彼に会いに行くところだ)と新しい用法(彼に会うつもりだ)の間で両義的だ。

一方、be going toの場合と「～んと」の場合の間には、同音の2用法の共存のありかたに相違もある。1つには、be going toではその2用法の間で文全体の真理条件が異なる(したがって違いが容易に気づかれる)のに対して、「～んと」の場合はその2用法A,Bの間で文全体の真理条件が同じである(したがって違いに気づくには本稿のようにテストを施して分析する必要だ)、という点だ。

もう1つには、be going to の2用法は、音声的には連鎖 going to が縮約ができるかどうかによって区別することができる。すなわち、文を I'm gonna see him. と発音してもよいのは新しい用法においてのみである。では、「～んと」(および(42)の(a)類の「～ないと」「～なければ」)の2用法も、何らかの音声的な手立てによって判別することができるのだろうか。なぞだ。

参考文献

- 赤塚紀子 (1998) 「条件文と Desirability の仮説」、赤塚紀子、坪本篤朗 『モダリティと発話行為』 1-97, 研究社出版
- 今仁生美 (1993) 「否定量化文を前件にもつ条件文について」、益岡隆志 (編) 『日本語の条件表現』 203-222, くろしお出版
- 加藤泰彦 (2003) 「否定のスコープと量化」、北原保雄 (編) 『文法 I』 157-180, 朝倉書店
- 平田一郎 (2010) 「肯定の意味素性指定を受けた NegP と形式動詞の挿入について」、『言語研究』 137, 81-94
- 宮部真由美 (2014) 「望ましくないものをさしだすシナイト節の従属複文—従属節が「仮定条件」を表わす従属複文の分析—」 『日本語文法』 14, 1-19
- 山部順治 (2001) 「補助動詞「おく」の意味」、『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語日本文学編』 25, 53-78
- _____ (2002) 「岡山市とその近郊の若者の日常生活語における、補助動詞「おく」「おる」の文法的使い分け：ノートルダム清心女子大学英語英文学科の学生を対象とする、質問票調査の報告」 『ノートルダム清心女子大学紀要文化学編』 26, 14-36
- _____ (2003) 「西日本方言の補助動詞「おく」の、事態が望ましいことを表示する機能」 『日本言語学会 第127回大会予稿集』 104-109
- _____ (2009) 九州北部方言で現在進行中の文法変化「答えが合っと{れ→け}ばいいな。」九州方言研究会 第28回研究会での発表、7月4日、佐賀大学
- _____ (2010) 「現在進行中の文法変化—補助動詞「おる」から「おく」へ—」、上野善道 (監修) 『日本語研究の12章』 98-113, 明治書院
- Akatsuka, Noriko McCawley & Susan Strauss (2000) Counterfactual reasoning and desirability. Elizabeth Couper-Kuhlen & Bernd Kortmann, eds., *Cause-condition-concession-contrast: cognitive and discourse perspectives*, pp.205-234. Berlin: Mouton de Gruyter.

- Bybee, Joan (2012) Where does grammar come from? Rickerson, E.M. and Barry Hilton, eds., *The five-minute linguist*, second edition, pp.60–63. Sheffield: Equinox.
- _____ (2015) *Language change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fujii, Seiko (2004) Lexically (un)filled constructional schemes and construction types: The case of Japanese modal conditional constructions. Mirjam Fried & Jan-Ola Östman, eds., *Construction Grammar in a Cross-Language Perspective*, pp.121–155. John Benjamins.
- Kato, Yasuhiko (2000) Interpretive asymmetries of negation. Laurence Horn & Yasuhiko Kato, eds., *Negation and polarity : syntactic and semantic perspectives*, pp.62–87. New York : Oxford University Press.
- Hasegawa, Nobuko (1991) Affirmative Polarity Items and Negation in Japanese. Nobuko Hasegawa. Carol Georgopoulos and Roberta Ishihara, eds., *Interdisciplinary approaches to language: essays in honor of S.-Y. Kuroda*, pp.271–285 Dordrecht : Kluwer Academic.
- McGloin, Naomi Hanaoka (1976) Negation. In: Masayoshi Shibatani, ed., *Japanese generative grammar (Syntax and Semantics, volume 5)*, pp.371–419. New York: Academic Press.
- Neef, Martin (2005) On some alleged constraints on conversion. Laurie Bauer & Salvador Valera, eds., *Approaches to conversion/zero-derivation*, pp.103–130. Münster: Waxmann.
- Plag, Ingo (2003) *Word-formation in English*. Cambridge: Cambridge University Press.

Abstract

The term “negative conditional forms” shall in this article refer to verb forms in Japanese that formally contain the negative *nai* and one of the conditional endings: V-(a)*naito*, V-(a)*nakereba*, V-(a)*nakattara*, V-(a)*nai nara* (V: verb stem). “Negative conditional sentence” shall refer to a sentence that contains one of the negative conditional forms.

Negative conditional sentences in some usage (such as *ame ga hur-anaito komaru*. ‘It will be a bother IF it does NOT rain.’) convey that the situation of the proposition (for it to rain) is desired. The present article, focusing on the V-(a)*nto*, the Kyushu-Chugoku-Shikoku verbal form corresponding to Standard V-(a)*naito*, argues that V-(a)*nto*, along with some other species of negative conditional forms, is ambiguous between conveying the desirability of the proposition (the speaker wants it to rain) and conveying the negation of the predicate (not raining): it can mean either, but not both at a time. Thus, negation does *not* “get overlaid with” desirability, but negation

“alternates with” desirability.

This claim is motivated by the following observations in Kyushu-Chugoku-Shikoku Japanese. The auxiliary verb ok-u ‘put, keep’ in one of its usages gets suffixed to a non-volitional predicate: ex. *keeki ni ichigo ga nott-ok-anto sabisii kanji ni naru*. ‘Something feels missing **IF** a cake does **NOT** have a strawberry on it.’ Ok-u in this usage only occurs in contexts conveying desirability. Contrary to this, negative polarity items such as *nanimo* ‘anything’ only occur in contexts conveying negation. Inside the V-(a)nto clause, negation and desirability are distributed complementarily: either of them can occur but both cannot co-occur. This and other similar observations lead us to conclude that the V-(a)nto clause can convey *either* negation or desirability in different times but not *both* at a time.

(やまべ・じゅんじ ノートルダム清心女子大学)